



発行所
天理教祝梅分教会
千歳市祝梅 598
☎0123-29-2055
復刊第三十一号

秋季大祭 神殿講話

本日は、秋季大祭を賑やかに勇んでつとめさせて頂きました。ご参拝ありがとうございます。

この十月は天理教の立教の月柄となります。天保九年十月二十六日に天理教が立教し、今年で百八十六年を迎えます。私たちは、教祖より親神様の思いをお教えいただき、教祖のひながたは、どんな不自由な生活の中でも、親神様のご守護の有難さに目を向ければ、喜びに気付くことができるということをお教えています。

昨年、本部秋季大祭で諭達第四号が発布されました。真柱様は、「年祭をつとめる意味は変わりません。しかし、時の流れと共に、年祭をつとめる度に、そのつとめる人の顔ぶれは多少なりとも変わって行くのであります。その中に

は当然のことながら、年祭の意味や、どういう気持ちでつとめるか分からない人もいるのであります。全教が心を揃えるためにも、知らない人は年祭の意味を知り、そして親の思いに添わせてもらおうと積極的に歩む、そういう気持ちになつてもらうそのための材料としてこの諭達が利用してもらえればいいかと思えます。」とお言葉をくださいました。その諭達の最後の文章が「教祖にご安心頂き、お喜び頂きたい」です。

元旦祭にもお話しましたが、十二月三十一日の朝づとめの前に火災報知器の警報が鳴りました。食堂が火の元だと調べましたが、誤作動のようです。しかし、気になるので「おさしづ」の火事について調べてみました。いくつかの「おさしづ」の要約には、

- ・避けることのできない事情にあったのであるから、すつきり心を

取り直して事情を治めよ。どういう神意であろうかと思っているが、なかなか深いいんねん事情である。

- ・火災にあったことをいつまでもくよくよと思わず、これから通り抜けて行くべき将来の心を定めえよ。という内容でした。日々自分の思い通りになることは少ないですし、思いがけず出会う身上や事情に悩み苦しむことが多いのですが、少しでも喜びに変えられるようにと思えます。

「傘屋と下駄屋」という昔話があります。ある峠の茶屋をおばあさんがしていました。そのおばあさんはいつも空を見ては浮かない顔で、雨が降れば「ああ、きょうは雨か」とため息をつき、晴れば「きょうは晴れか」と暗い顔をしていました。あるお客が、いったいどうしたのかとわけを尋ねると「上の息子は傘屋に、下の息子は下駄屋になったが、晴れば傘が売れずに長男が困り、雨の日は下駄が売れずに次男が困ると思

い、それでいつも苦しいのと。それを聞いたお客は「それなら、考えを変えればよい。『晴れの日には下駄屋が儲かってけっこうなこと。雨の日には傘屋が儲かってけっこうなことだ』だと。おばあさんは、自分が悪い方ばかりを見て生きてきたことに気が付き、それ以降は、良い方を見て明るく考えるようにしたため、ずっと笑顔で過ごすようになったとのことである。

教祖は、「不足に思う日はない。皆、吉日やで。世界では、縁談や棟上げなどには日を選ぶが、皆の心の勇む日が、一番吉日やで。」とお教えくださっています。私たちは心を自由に使える訳ですから、昔話のおばあさんのように良い方を見て明るく考えたいものです。心の持ち方で見える世界が変わるはずですよ。

また、併せて周りの方にたすかしてもらいたい気持ちをお互い持ちたいものです。自分は微力とは思わないで、私たちのたすかしてもらいたいという願いは必ず親神様に受け取ってくださると信じて人のたすかりを願っていきましょ

う。少しづつ寒くなりましたが、来月もご参拝いただきますようお願い申し上げます。本日はありがとうございました。

百年祭へ飛躍の台

～親の声に添ってにをいがけ
おたすけを～

祝梅分教会 三代会長 高橋美津志

前編

暦は人が造り、天候は神が造ると申します。

本日は薫風さわやかな晴天に恵まれまして、只今、教祖百年祭に向う三年千日の中に相応しい、意義深い婦人会の総会が執り行われまして洵におめでとございました。この尊い総会に、理の浅い者がお声を戴きまして洵にありがとうございます。未熟を省みずにお言葉に甘えまして出さして頂いた次第です。

神様に生かされている私達人間にとりまして、三つの大事なものがございます。それは月給袋と胃袋とおふくろであります。

このおふくろをお道では、女は道の台、家庭の台、教会の台だと申しております。女という字の横に台と書けば、始めと読むんです。

女の方が我が家のいんねんを切り、より素晴らしい運命を培うための、又、造りだすための苦勞を始める人であると思うのです。

私のおふくろは昭和二六年二月五日に四十二才という若さをもちまして、父親の女道楽に苦しみなから生涯の幕を閉じたのです。考えてみますと、矢張り人間の幸福というのは親・配偶者・子供のこの三つによって人の幸せ、不幸せは定まると申します。

私の母は夫運が悪く、私にとりましては父親運が悪かったのです。女道楽の限りを尽くした父の許で、何一つ喜ぶこともなく母は亡くなっていききました。その母親を眺めました時に、お道の方はよく徳がある・徳がないとか、運が

良い、運が悪いと申します。果して徳というものはどういふものであるかと思案致しますと、徳というものは持っているものが自分に役立つことあります。仮に自分の倉庫に五十俵の米がある。しかし、一俵の粥、一粒の米さえ喉を通らんようでは、持っているお米が自分に役立たない。かえって嘆

き悲しみの種である。或いはタン

スの中に流行の衣服が満ち溢れている。しかし、畳一枚、ベッド一つが己が住む世界となつて病で呻

吟している。持っている衣服が自分に役立たない。その着物を見るたびに元気でいた当時が思いしのべて、悲しさが胸につまづいて

く。持っているものが役に立たない。又、自分が結婚して妻がいるが、その妻は経済観念が乏しくて身持ちが悪い。持っている妻が苦しみの種である。

世界では、(子供が夫婦のカスガイ)と申します。カスガイとはつなぐ道具であります。長い夫婦生活の内には、夫婦の間にヒビが入ることがあり、溝が出来る場合があります。こうした時に子供がカ

スガイの役目をするんです。ところが、最近の子供はつなぎのカスガイの役目をしないんです。徳のある家庭の子供だけがカスガイの役目をするんです。サラ金地獄に追われて子供と共に自殺をしてみたり、子供を置いて愛人と一緒に蒸発をしていくんです。徳のない家庭ではカスガイの役目が出来ていないんです。

又、考えてみますと人間には長所・短所といった利点・欠点があります。しかし、子供に徳を積んでおかないと、その子供がカスである父親の欠点・短所、母親の欠点・短所というカスだけの性格を見に付けてくるんです。そのカスが非行に走らせ、親のカスが親にガイ(害)を及ぼすのです。ですから、カスのガイと言うんです。徳がないとそのようなになってまいります。



私の母は、私をカスガイとして辛抱してくれました。丁度亡くなる時であります。危篤の報を受けて母親の許に帰りました。既に人の顔を判別出来ない程病状は進んでおりました。私の手を枯木のようには瘦せた手でしっかりと握り、蚊の鳴くような細い声を私の耳元で「お前なあ、金や物があれば人間は幸福になると思っていた。その為に苦勞に苦勞を重ねてお金を貯め込んだ。しかし、その貯めたお金の為にお父さんは女道楽に走り、私はなんにも幸福ではなかった。金や物が人を幸福にしてくれるものではない。だから私のように苦しんでいる人を一人でも救っておくれ。」この言葉を残して息を引き取りました。父親は葬儀にも帰ってまいりません。母のお骨を抱きまして母の里に埋葬致しました。しかし、母が亡くなる前に兵神大教会の役員のお一人が母にをいをかけてくれ、おたすけをしてくれたんです。その先生が「お母さんの遺言を守ろうとするなら天理教の布教師になることが一番の早道なんだよ。亡くなったお母

さんの遺志を継ごうとするなら天理教になりなさい。」このように導いてくれたんです。私は親戚一同反対する中に修養科に入り、兵神大教会の青年づとめをしたのであります。そうして兵神大教会長様の御命で単独布教に出させて頂き、七年三ヶ月間、名古屋・東京・千葉で単独布教をさせて頂いたんです。昭和二十九年十一月に兵神大教会長様が東京に巡教にまいりました。大教会が板宿という所から須磨という所に移転することに決定しており、移転建築も進み、十二月二十二日に奉告祭を執り行うのでお前も帰って来いと言うのです。

私は一人でこの道に飛び込みましたので、誰一人心をかけてくれる人は居りませんでした。ですから道端に落ちていた僅かな千圓を拾うと三日間の食料となり、子供が拾った蟻にまみれたキヤラメルも水で洗ってなめますと二日間もつんです。そういう布教の最中でありますから、大教会長様が須磨に帰ってこいと言われた時は、温かい御飯が食べられるという思いがありましたので、飛びつく思いで有難うございますと言ったのです。まして親であるから帰れと言うからには旅費はくれるだろうと思っておりますが、私の考えは甘く、一銭もくれずに東京を發たれたのであります。後で役員先生が言うには、「おさづけは道の路銀と仰られる。大教会に帰ろうと思うならば歩いてでも帰ってこい。あいつはそれが出来る人間だ。」と大教会長様が言われたというのです。

兼々私が仕込まれましたのは、親が声を掛けた時、人間の思案・先案じ・我がまゝから親の声を切ったなら、親を通して導いてやりたい、救ってやりたい、たすけてやりたいとされる親神様の親心を切るようなもの。言葉を変えて申すならば、幸福に背を向けて歩いて行くようなもので、言葉を切ったら理が消える。神の働きはないんだと仕込まれていたんです。私もそれを思い浮かべまして、東京から大阪を経て神戸の先の須磨に帰ることに心定めをしました。

次号へ続く

夕張大教会 少年会

❄️❄️❄️ 冬のお楽しみ会 ❄️❄️❄️

日 時 11月23日(木・祝)
10:00~14:00 (受付は9:30~)

参加御供 少年会員、育成会員ともに 300円
持ち物 うわ靴

プログラム プチ運動会(岩見沢市民総合体育館)
神殿ひのきしん、
神様のお話 など

参加される方は11月14日までに
祝梅分教会までご連絡ください!



布教の家週報録より

九月十六日 愛知寮 高橋悟志

九月も中旬に入り、暑さも落ち着くと思ったら、全然そんなこともなく暑い日が続いている名古屋からお届けしています。

布教の家生活も半年が過ぎようとしています。通い先の方々への丹精も続けながら毎日にをいがけ・おたすけに歩かせてもらっていますが、たまに勇めない日もあります。そんな日は、適度に休憩しながらも気を引き締めて通らせていただいています。私は笑顔でにをいがけをすることが大事だなと考えていて、戸別訪問、チラシ配り、声掛けの時は笑顔を決やさず、周りの人に笑顔になってもらえるように頑張っております。



『東京布教』

◎昭和二十八年。私は東京布教に出た。

貧しい人の住む「バタヤ部落」に兵神大教会芳洋第三伝道所の看板をかけ、当所に十五日間、上野方面に十五日間匂いがけに歩いた。

○当時、上野駅の地下通路には、世間から浮浪者と見下げられた人たちが八名いた。いつしか私は彼達と親しくなり寝起きを共にした。

世間の人は浮浪者は三日すればやめれないと言うが、そんな気楽な仕事ではない。

毎日、場所を変えて座り、いつも頭は下げ通したよと

彼達の愚痴を聞きながら

「色で身を売る西瓜でさえも中に苦勞（黒）の種がある」

誰にでも苦勞がありますよ

どうか一日も早く立ち直りましょうと私は励ました。

◎後年、浮浪者と暮らしながら教理を取り次ぐ私の姿を見たという人のうわさ話が流れ「上野の浮浪者から空を駆けめぐる教会長」と題した講演を依頼された。



若人会

ハートクリーンキャンペーン報告

十月八日（日）、教会内の窓拭き、網戸外などをさせていただきました。参加者は少年会員一名、育成会員四名、ひのきしん七名の計十二名でした。



ボーリング大会 報告

十月二十二日（日）、第六十二回ボーリング大会をフジボウルにて開催させていただきました。参加者は十六名。みんなでボーリングを楽しみ、親睦を深めました。



あとがき

今月は四十年前、美津志会長さんが教祖百年祭へと向かう旬に講演されたお話を掲載させて頂きました。

美津志会長は晩年、毎日のように亡くなったお母さんのお話をしてくださっていました。

一人の女性としては悲しい生涯だったかも知れませんが、出直してから五十年六十年経っても、これだけ子供が慕ってくれるなんて、母としてはなんと幸せな方かと思つたものです。

きっと、今頃は生まれ変わって女性としても幸せな人生を送ってくださっているに違いない...と思います。

来月は後編を掲載させて頂きます。お楽しみに！

